

無量壽

平成15年8月13日
浄土真宗 本願寺派
林徳寺 発行
025 - 276 - 3456

浄土真宗物語②

親鸞聖人が越後に流罪と決まったのは、一二〇七年三月一八日（建永二年二月一八日）のことといわれています。当時の越後は、さびしい片田舎であったと思われる。ましてや時期は冬のもつとも寒い頃です。まだ三五歳の若さであったとはいえ、さぞや大変なご苦労があたりだったことと思われまます。



親鸞聖人探検マップ
(上越市立国府小学校のホームページより)

この後、聖人は七年間、越後の国にお住まいになられました。この間の聖人にゆかりの史跡が、現在の上越市に多く残されています。

居多ヶ浜 聖人が流罪となって越後に上陸されたところ。

五智園分寺 境内に、聖人の配所であった「竹之内草庵」があります。

国府別院 聖人が「竹之内草庵」から後に移り住んだ「竹ヶ前草庵」があったところ。小丸山別院とも言います。

そのほか、居多ヶ浜や**居多神社**には、越後親鸞七不思議の「**片葉の葦**」があります。

このように多くの史跡が残されるほど、聖人は越後の国に大きな足跡を残されました。その中でも最も大きな出来事は、**恵信尼**（えしんに）様と結婚されたことでありましょう。恵信尼様は、越後の豪族であった三善為教（みよしためのり）の娘と言われています。そして聖人が三九歳、恵信尼様が三〇歳の三月三日に第二子信蓮坊が生

まれたことがわかっています。

一一二一（建暦元）年十一月十七日、聖人は法然上人と同じ日付で、その罪をゆるされました。しかし法然上人はそのわずか二ヶ月後には亡くなられたため、とうとう聖人は、お会いすることができませんでした。その後一一二四（建保二）年に、聖人は奥様と子供さんを伴って、関東の常陸（茨城県）に移られたのです。

(続く)

連研受講者募集中

来年から、第九期「新潟組連続研修会(連研)」が新たに始まります。これは新潟市近辺のお西のお寺を会場に、二年間で十二回の研修を行うものです。

研修といっても、そんなに堅苦しいものではありません。浄土真宗の教えについての学習はもちろんですが、話し合い法座、お経の読み方や焼香などの作法の練習、仏教讃歌の練習などもあります。

この連続研修の受講者を募集しています。希望の方は十五年度中に林徳寺へお申し出ください。なお、参加費は寺院負担です。

浄土真宗の作法・心得(シリーズ2)

お仏壇のお荘厳しやうげん

お仏壇は、ご本尊である阿弥陀如来を安置するためのものです。つまり、お寺の本堂を家庭におきやすいように、小さくまとめたものと言ってもよいでしょう。

阿弥陀如来は、すべての諸仏、諸菩薩、先祖、さらに私たちを含めた、あらゆる命の親様です。それで阿弥陀如来を安置し、お参りをさせていただくことによって、遙か昔からのご先祖のごごときを、敬うことになるのです。

またお仏壇には、お寺の本堂に備わる仏具とほぼ同じものが、それぞれ小型化されて備わっています。左の写真と、ご家庭の仏壇を見比べてみてくだ



林徳寺本堂のご本尊

ささい。

阿弥陀如来

のすぐ前に、

上卓うわしやくといわれ

る机がありま

す。ここには

四具足いぐそくという

仏具がおかれ

ます。

また、その前

に大きな前卓まへしやくという机があり、ここには三具足みつぐそくがおかれます。

四具足

「ろうそく立て」一つ、「火舎かしゃ」一つ、これに「華瓶けびん」一対をあわせて四具足といえます。火舎とは仏前を清らかにするためにお香をたくためのものです。また華瓶とは、ここに水を入れ櫛くしなどの青木をさして供えるためのものです。浄土真宗では、水はこの華瓶に入れ、櫛をさしてお供えをしますので、コップなどでお供えすることはしません。しかし、一般にお仏壇の具足は小型化されていて、実際に用いることは難しいことが多いのです。その場合は、それぞれの具足を、そのまま仏壇にお飾りいただければ結構です。また、あえて水を供える必要もありません。なお、仏飯は上の写真のように、この四具足の間に供えます。

三具足

「ろうそく立て」、「香炉」 「花瓶」各一つをあわせて三具足といえます。普段お参りをする際に、実際にろうそくを立て、お香をたき、お花を供えるのはこの仏具になります。この中で足が二本ある仏具は、その一本が、こちら向きになるようにおきますので注意が必要です。

日本語になった仏教の言葉 ⑤

《安心》

私たちが普段よく用いるこの言葉は、仏教用語では「あんじん」と読み、浄土真宗では「信心」と同じ意味に用いられる大切な言葉です。

蓮如上人の御文章に、

『当流の安心の一義というは、ただただ南無阿弥陀仏の六字のころなり』

『安心というも信心というも、この名号の六字のころをよくよく心得る者を他力の大信心をえたる人とは名付けたり』

と、お名号のいわれを聞きひらくことこそ、当流の安心であり、信心であることをお示しになってあります。

字解によれば、「安」の字は家の中に女が臥ふしていることを表す文字であるといえます。家庭に母が落ち着いていることは、安らかな家庭を作るもとであるように、母なる如来のまします家庭は信心の家であり、その如来のお育てを蒙かぶる家でこそ安らかなよろこびがめぐまれるのであります。

『私たちの言葉』 経合昇芳隆より